

「十二人を遣わす」

マルコの福音書 6:7～13

はじめに

今日の箇所は、イエシュアが十二人の弟子たちをお遣わしになるという場面です。遣わすとは、遣わす者の代わりに、別の者がその遣わす者の役目を担い、それを果たすことを意味します。ですから遣わされる者は、遣わす者の言う事をよく聞き、それを忠実に行わなければなりません。ここでイエシュアは弟子たちにご自分の權威を授け、それと同時にいくつかの守るべき約束事をお命じになります。それは一風変わった、人の常識から外れたものでした。そこには一体どんな意味が、神のご計画が指し示されているのでしょうか。ご一緒に見てまいりましょう。

1. 十二人と二人

【新改訳 2017】 マルコの福音書

6:6 …それからイエスは、近くの村々を巡って教えられた。

6:7 また、十二人を呼び、二人ずつ遣わし始めて、彼らに汚れた霊を制する權威をお授けになった。

まずイエシュアは「十二人を呼び、二人ずつ遣わし始めて…」とあります。ここに記された出来事では「弟子」または「弟子たち」という表現は使わず、常に「十二人」という呼び方にこだわっているように感じられます。この弟子たちが「十二人」であった理由、それは以下のイエシュアの御言葉に明示されています。

【新改訳 2017】 マタイの福音書

19:28 そこでイエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに言います。人の子がその栄光の座に着くとき、その新しい世界で、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族を治めます。

このように、「十二人」の弟子たちには、「人の子」すなわちイエシュアが「栄光の座に着く」「新しい世界」すなわち「神の国」が現実のものとなる時、そこにおける中心的存在となるイスラエルの民「イスラエルの十二の部族」の存在が指し示されていると考えられます。

またその十二人を「二人ずつ遣わし」たというこの記述は、以下の出来事の記述との結びつきが考えられます。

【新改訳 2017】 創世記

3:22 神である【主】はこう言われた。「見よ。人はわれわれのうちのひとりのようになり、善悪を知ることになった。今、人がその手を伸ばして、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きることがないようにしよう。」

これは最初の人アダムとその妻エバが罪を犯し、エデンの園を追い出されるという場面ですが、ここで「遣わす」という意味のヘブル語シャーラハ(נְשָׂא)は本来、「人」がシャーラハ「その手を伸ばして」そして「いのちの木からも取って食べ、永遠に生きること」を意味していることがわかります。そして「二人ずつ」という記述には、同じくこのエデンの園に置かれたアダムとエバを指し示したものだと考えられます。神はかつて「人がひとりであるのは良くない。わたしは人のために、ふさわしい助け手を造ろう。(創世記 2:18)」と言われ、アダムにエバを与えられました。ですから「二人」とは、人にとって最も良い状態を表していると言えます。また使徒パウロはエペソ人への手紙の中でこの事実をキリストすなわちメシアであるイエシュアと教会を指していると述べました。

【新改訳 2017】エペソ人への手紙

5:31 「それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。」

5:32 この奥義は偉大です。私は、キリストと教会を指して言っているのです。

ですから「十二人」という数がイスラエルを指しているならば、この「二人」というのは「花婿なるイエシュアと花嫁なる教会」という存在が指し示されていると考えられ、いずれも完成された「神の国」の中心的構成員であり、これらの存在が永遠のいのちをもつとともに住む世界が「神の国」であるということが、ここには表されていると考えられます。

2. 汚れた霊を制する

そしてイエシュアはこの十二人に「汚れた霊を制する権威をお授けになった」とあります。「神の国」が建つ時、汚れた霊、悪霊および悪魔と呼ばれるサタンはその働き、行動を完全に封じられてしまいます。ヨハネの黙示録 20:1~3 にこう預言されているとおりです。

【新改訳 2017】ヨハネの黙示録

20:1 また私は、御使いが底知れぬ所の鍵と大きな鎖を手にして、天から下って来るのを見た。

20:2 彼は、竜、すなわち、悪魔でありサタンである古い蛇を捕らえて、これを千年の間縛り、

20:3 千年が終わるまで、これ以上諸国の民を惑わすことのないように、底知れぬ所に投げ込んで鍵をかけ、その上に封印をした。その後、竜はしばらくの間、解き放たれることになる。

このように、「悪魔でありサタンである古い蛇」は「千年の間縛り」られてしまうことが記されています。「神の国」が「千年王国」とも呼ばれるのはこのためです。現在この地上はサタンと悪霊どもが「諸国の民を惑わすこと」が許されている、つまりサタンに「権威」が与えられている時代ですが、やがてそれは奪われ、メシアであるイエシュアに、そしてイスラエルと教会に与えられます。その事実が、神のご計画が「彼らに汚れた霊を制する権威をお授けになった。」という記述には表されていると考えられます。

3. 杖一本

【新改訳 2017】マルコの福音書

6:8 そして、旅のためには、杖一本のほか何も持たないように、パンも、袋も、胴巻の小銭も持って行かないように、

イエシュアは弟子たち十二人を遣わす際、権威を与えられただけでなく、いくつかの約束事を命じられました。それはまず、旅に行かせるというのに持ち物はなんと「杖一本」のみで、「パンも、袋も、胴巻の小銭も」持って行くことを禁じました。これは一体どういう意味でしょうか。実は聖書の中に、彼らのように「杖一本」だけを持って旅に出た人物のことが記されています。それはアブラハムの子イサクの子ヤコブ、すなわちイスラエルです。創世記 32:10 にこう記されています。

【新改訳 2017】創世記

32:9 ヤコブは言った。「私の父アブラハムの神、私の父イサクの神よ。私に『あなたの地、あなたの生まれた地に帰れ。わたしはあなたを幸せにする』と言われた【主】よ。

32:10 私は、あなたがこのしもべに与えてくださった、すべての恵みとまことを受けるに値しない者です。私は一本の杖しか持たないで、このヨルダン川を渡りましたが、今は、二つの宿営を持つまでになりました。

ヤコブすなわちイスラエルはこのように「一本の杖しか持たないで」旅立ちました。そして「『あなたの地、あなたの生まれた地に帰れ。わたしはあなたを幸せにする』」という神の命を受けて帰還しました。ですから、「杖一本」だけを持って旅に出る行為には、イスラエルが、イスラエルの民が、神が彼らに与えられた地に帰り、そこで繁栄し、祝福されることが指し示されていると考えられます。

またこの「杖」のことをヘブル語でマツケール(מַטֵּה)と言いますが、この最初の言及からもイスラエルが祝福される事実が読み取れます。

【新改訳 2017】創世記

30:37 ヤコブは、ポプラや、アーモンドや、すずかけの木の若枝を取り、それらの白い筋の皮を剥いで、若枝の白いところをむき出しにし、

30:38 皮を剥いだ枝を、群れが水を飲みに来る水溜めの水ぶねの中に、群れと差し向かいに置いた。それで群れのやぎたちは、水を飲みに来たとき、さかりがついた。

30:39 こうして羊ややぎは枝の前で交尾し、縞毛、ぶち毛、斑毛のものを産んだ。

30:43 このようにして、この人は大いに富み、多くの群れと、男女の奴隷、それにらくだとろばを持つようになった。

これはヤコブが伯父のラバンのもとで働いていた時のことです。「若枝、枝」と訳されているのが聖書で最初の、本来のマツケールです。なぜこのようになったのかは不明確ですが、ヤコブはこのマツケールを用いて「大いに富み、多くの群れと、男女の奴隷、それにらくだとろばを持つようになった。」ということだけは確かです。ですからこの「杖」マツケールという言葉自体にも、ヤコブすなわちイスラエルを、その民を大いに富ませ、繁栄させ、祝福するという意味が込められていると考えられ、イエシュアが弟子たちに「杖一本」だけを持たせた事実には、神のご計画がイスラエルにあること、イスラエルを祝福し、イ

スラエルによって祝福されるという、神のご計画がまさにイスラエルこれ一本であることが表されていると考えられます。

4. 履き物と下着

【新改訳 2017】 マルコの福音書

6:9 履き物ははくように、しかし、下着は二枚着ないようにと命じられた。

さらにイエシュアの十二弟子に対する旅の約束事は続きます。「履き物ははくように」、これは常識的にも当然と言えば当然のことなのですが、「履き物」という意味のナル(נעל)の最初の言及を見てみると、先の内容を補足するかのような意味が見えてきます。

【新改訳 2017】 創世記

14:21 ソドムの王はアブラムに言った。「人々は私に返し、財産はあなたが取ってください。」

14:22 アブラムはソドムの王に言った。「私は、いと高き神、天と地を造られた方、【主】に誓う。

14:23 糸一本、履き物のひも一本さえ、私はあなたの所有物から何一つ取らない。それは、『アブラムを富ませたのは、この私だ』とあなたが言わないようにするためだ。

これはイスラエルの父祖アブラムとソドムの王とのやり取りです。その当時アブラムの甥のロトがソドムに住んでいましたが、ケドルオメルという大王が来てソドムの財産をロトの家もろとも奪い去ったため、アブラムは戦い、これを奪い返しました。ソドムの王は彼に感謝し、自分の財産を与えようとしたのですがアブラムはこれを断りました。ここに聖書で最初の「履き物」ナルがあります。アブラムはソドムの王に「糸一本、履き物のひも一本さえ、私はあなたの所有物から何一つ取らない。それは、『アブラムを富ませたのは、この私だ』とあなたが言わないようにするためだ。」と言いました。つまりアブラムを富ませ、祝福する御方は、ただ「いと高き神、天と地を造られた方(創世記 14:19)」だけであるということです。アブラムの子孫であるイスラエルの民を祝福するという神のご計画は、人の力や富によってではなく、ただ神によってのみなされる、ということがこの「履き物ははくように」という約束事には表されていると考えられます。

また「下着は二枚着ないようにと命じられた」ことについてですが、「下着」と訳されていますが、ヘブル語では「(そでつきの)長服」という意味のクットネット(קִטְנוֹתַי)という言葉が使われています。この言葉は本来、以下の場面で使われました。

【新改訳 2017】 創世記

3:21 神である【主】は、アダムとその妻のために、皮の衣を作って彼らに着せられた。

エデンの園で罪を犯し、追放されるアダムとエバのために、「神である【主】」が着せてくださった「(皮の)衣」、ここに聖書で最初のクットネットがあります。彼らはこの時すでに自分たちでいちじくの葉をつづり合わせて腰の覆いを作っていましたが(創世記 3:7)、神は彼らにクットネットを着せてくださったのです。イエシュアが命じられた「下着は二枚着ないように」とは、この事実を指し示しているのではない

かと考えられます。つまりアダムとエバが作った腰の覆いのような自分たち、人の手で作ったものは必要ない、ただ神が着せられた「皮の衣」のように、神からのものだけを受け取るということを指し示していると考えられ、先の「履き物」ナアルの指し示す意味と合致します。ですからイエシュアが弟子たちに「履き物ははくように、しかし、下着は二枚着ないようにと命じられた。」事実には、イスラエルの民を富ませ、繁栄させ、祝福するという神のご計画は、「神の国」の完成は、神である主、この御方だたお一人の御業によって成し遂げられるものであり、人の力、助けを必要とするものではないということが表されていると考えられます。

5. ちりを払い落とす

【新改訳 2017】 マルコの福音書

6:10 また、彼らに言われた。「どこでも一軒の家に入ったら、その土地から出て行くまでは、その家にとどまりなさい。

6:11 あなたがたを受け入れず、あなたがたの言うことを聞かない場所があったなら、そこから出て行くときに、彼らに対する証言として、足の裏のちりを払い落としなさい。」

またイエシュアが弟子たちに命じられた旅は、あちこち歩き回るのではなく、「一軒の家に入ったら…その家にとどまりなさい」というものでした。普通私たちとしては、病を癒し、悪霊を追い出す権威を受けたのだから、これらに苦しんでいる人々を探し求めて、訪ねて回る方が良いと考えますが、イエシュアの方法は違い、一箇所にとどまり、そこに「集める」というものでした。実際に「あなたがたを受け入れず」という箇所使われているヘブル語は「集める、集まる」という意味のアーサフ(אָסַף)です。これはイエシュアの働きが、究極的には散らされたイスラエルの民をアーサフ「集める」ことにあることを表すためだと考えられます。こう預言されているとおりです。

【新改訳 2017】 イザヤ書

49:5 今、【主】は言われる。ヤコブをご自分のもとに帰らせ、イスラエルをご自分のもとに集めるために、母の胎内で私をご自分のしもべとして形造った方が言われる。私は【主】の御目に重んじられ、私の神は私の力となられた。

【新改訳 2017】 ミカ書

2:12 ヤコブよ。わたしは、あなたを必ずみな集め、イスラエルの残りの者を必ず呼び集める。わたしは彼らを、囲いの中の羊のように、牧場の中の群れのように、一つに集める。こうして、人々のざわめきが起こる。

しかし「あなたがたを受け入れず、あなたがたの言うことを聞かない」者たち、つまり集まって来ない者たちには、「足の裏のちりを払い落としなさい」とイエシュアは命じられました。「足」はレゲル(לֶגֶל)と言い、本来は足を休める場所、帰る場所を指し示す言葉です(創世記 8:9)。そして「ちり」はアーファール(אֶפְרַיִם)で、人は神によってこのアーファールから造られました(創世記 2:7)。そして「払い落とす」ことをナーアル(נָאַר)と言いますが、この最初の言及である出エジプト記 14:27 を見てみましょう。

【新改訳 2017】 出エジプト記

14:27 モーセが手を海に向けて伸ばすと、夜明けに海が元の状態に戻った。エジプト人は迫り来る水から逃れようとしたが、【主】はエジプト人を海のただ中に投げ込まれた。

14:28 水は元に戻り、後を追って海に入ったファラオの全軍勢の戦車と騎兵をおおった。残った者は一人もいなかった。

「【主】はエジプト人を海のただ中に投げ込まれた。」ここに聖書で最初のナーアルがあり、それはエジプトの軍勢が神によって一人残らず滅ぼされたことを示しています。ですから「足の裏のちりを払い落とし」という行為には、安息の地、帰るべき場所である「神の国」から払い落とされ、滅ぼされる人のことが指し示されていると考えられます。

「一軒の家」、「家」を意味するバイト(בַּיִת)は本来、ノアの箱舟の内側を意味する言葉です(創世記 6:14)。この内側に入らない者はみな滅んだのです。このように神のご計画とは、救うべき者を集めて救い、そして滅ぶべき者を払い落として滅ぼすというものです。その事実が、イエシュアが十二人の弟子たちに命じられた御言葉の中には表されていたと考えられます。

またちなみにイザヤ書 52:2 にこのような御言葉が記されています。

【新改訳 2017】 イザヤ書

52:1 目覚めよ、目覚めよ。力をまとえ、シオンよ。あなたの美しい衣をまとえ、聖なる都エルサレムよ。無割礼の汚れた者は、もう二度とあなたの中に入っては来ない。

52:2 ちりを払い落として立ち上がり、元の座に着け、エルサレムよ。あなたの首からかせを振りほどけ、捕らわれの女、娘シオンよ。

これは「神の国」においてイスラエルが、神のご計画されたその本来のあるべき状態に回復されるという預言の一節です。ここに「ちりを払い落として立ち上がり」という記述があり、ここにも同じく「ちり」アーファールも、「払い落とす」ナーアルも使われています。イエシュアはこの御言葉をも指し示して、神のイスラエルへの回復の約束をも指し示して「彼らに対する証言として、足の裏のちりを払い落としなさい」と言われたとも考えられます。

6. イスラエルによって

【新改訳 2017】 マルコの福音書

6:12 こうして十二人は出て行って、人々が悔い改めるように宣べ伝え、

6:13 多くの悪霊を追い出し、油を塗って多くの病人を癒やした。

「悔い改める」とは、ただ心の思いや考え方が変わるという意味ではありません。これをシューヴ(שׁוּב)と言い、本来は人が死んでその肉体が「土に帰る」ことを意味する言葉です(創世記 3:19)。だからと言って「悔い改める」とは単に死ぬことではありません。もう一度新しく造り変えられることを指し示していると考えられます。その身体、その肉体は、かつてのアダムがそうであったように、死ぬことのない、

朽ちることのないものです。神はやがて「神の国」の民となる者たちにそのような身体を与えようとしておられるのです。それが「悔い改める」と訳されたシューヴという言葉の中に込められた神のご計画であると考えられます。

また「神の国」において、「悪霊」どもはこの地上から追い出され、先に述べたように封印されます。それが「多くの悪霊を追い出し」という記述に指し示された神のご計画です。そして「油を塗って多くの病人を癒やした」ともありますが、この「油」シエメン(ימן)は本来、ヤコブすなわちイスラエルが、創世記 28:18 の場面で石の柱に注いだ油を指す言葉です。彼はこの石の柱をベテル、「神の家、国」と呼びました。ですからこのシエメンは「神の国」を直接的に指し示す言葉であると言えます。そして「多くの病人を癒やした」とありますが、「神の国」に病はありません。ここに使われている「(病を)癒す」という意味のラーファー(לפא)は本来、病気が治るという意味ではなく、出産を意味する言葉です。

【新改訳 2017】創世記

20:17 そこで、アブラハムは神に祈った。神は、アビメレクとその妻、また女奴隷たちを癒やされたので、彼らは再び子を産むようになった。

イスラエルの父祖アブラハムの祈りによって、異邦人であるアビメレクの家から子が生まれるようになったという出来事に、ラーファー本来の意味があります。これはアブラハムの子孫、イスラエルの民によって諸国の民が祝福されるようになるという、神のご計画を表したものだと考えられます。すなわちこう記されているとおりです。

【新改訳 2017】創世記

12:1 【主】はアブラムに言われた。「あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。

12:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福となりなさい。

12:3 わたしは、あなたを祝福する者を祝福し、あなたを呪う者をのろう。地のすべての部族は、あなたによって祝福される。」

22:18 あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。

このように、イエシュアは十二人の弟子たちを遣わすことで、「神の国」がイスラエルによって地上のすべての民が祝福されるという仕組みによって成り立つことをお示しになったと考えられます。もちろんこれは奥義ですから、当時の弟子たちは知る由もなかったでしょう。しかしこのように、今の時代に生かされている私たちには、この事実が解き明かされ始めているのです。これは聖書に記された預言の成就、「神の国」の到来が、いよいよ近づいているという証拠だと考えます。他の些末事に目を奪われ、虚しいことに心を奪われている場合ではありません。時は近づいているのです。ますます私たちの目が「神の国」に向けられますように、聖霊の助けが豊かにありますように。